中西嘉宏.『軍政ビルマの権力構造ーネー・ウィン体制下の国家と軍隊　1962-1988』京都大学学術出版会，2009 年，xiv+321 p.

山根健至 *

本書は地域研究者の手によるビルマ政治研究の書であり，国軍と国家の関係を分析対象としていることから政軍関係研究の書でもある．ビルマでは，1962 年にネー・ウィン将軍によるクーデタで軍事政権が成立し，彼が作り上げた国軍中心の体制は，ネー・ウィン体制とも称される長期安定軍政となって 1988 年まで 26 年間持続した．また，その体制が崩壊した後にも新たな軍事政権が誕生し，現在まで存続している．

このようなビルマの状況を鑑みて，筆者は本書の問いを，ネー・ウィン体制期にビルマ国家はいかに変わったのか，とりわけ，国家と国軍の関係はどのように変容したのか，ネー・ウィンはなぜ，どのようにして 26 年間にわたり権力者の地位を維持することができたのか，と設定する．そして現地調査で収集した資料の詳細な分析により回答を描き出し，同時に，ネー・ウィン体制後の状況にも通ずる考察を随所で行なっている．

まず，本書の概要を示したい．序章「ビルマにおける長期軍政とネー・ウィン体制」では，上述の問いを提示した後，本書を「国軍を中心にすえながら，同時に国軍と国家との関係がときどきの政治的条件のなかでどのように変容してきたのかを検討する」先行研究の系譜上に位置付ける．そして，国軍将校団に焦点を当て国軍の国家における制度配置とその変容に着目する分析視角を設定する．

第 1 章「帝国の辺境ー近代ビルマにおける国民国家建設と暴力機構」では，イギリスによって植民地化されてからネー・ウィン体制が成立するまでのビルマにおける国民国家と暴力機構の歴史を整理し，ネー・ウィン体制の歴史的背景を概観する．ビルマ国軍はビルマ国家と同様に，制度ー動員，統合ー分離の 2 つの軸の中で揺れ動きながら組織形成されてきた．そして独立直後に社会動員圧力と分離圧力の激化により国家が危機に陥った際，国軍が中心となり国家と社会の制度化と統合に向けた動員解除が急速に進められていく．その嚆矢となったのが 1962 年のネー・ウィンによるクーデタであった．

第 2 章「ビルマ式社会主義の履歴ー国家イデオロギーの形成と軍内政治」では，ネー・ウィン体制を思想的に支えた国家イデオロギーである「人と環境の相互作用の原理」の形成過程に焦点を当て，ネー・ウィン体制のイデオロギー的側面を考察する．1950 年代に参謀本部穏健派の国軍幹部たちは，国軍の政治不介入を原則に掲げた国軍改革を推進しようとしており，そのドクトリンの原案作成を任務としたのがチッ・フラインであった．しかし，1950 年代末以降，国軍内で参謀本部穏健派の周辺化が生じるとともに，1962 年にはクーデタが発生した．クーデタを契機に国軍は長期的な政治介入を開始したが，ネー・ウィンや国軍幹部たちに新体

* 立命館大学衣笠総合研究機構（ポストドクトラルフェロー）

制のための具体的なアイデアはなかった．そのような状況下，かつて憲法擁護と反共主義の文脈で書かれたチッ・フラインの未完の論考が，その位置付けを大きく変えて，憲法体制からの離脱と一党支配体制建設を正統化する公式イデオロギーとなったのである．

第 3 章「未完の党国家―ネー・ウィンとビルマ社会主義計画党」では，ビルマ社会主義計画党による一党支配体制の形成過程と実態について，ネー・ウィンに軍事政権から党国家への体制移行の意思が存在したと仮説を立て考察する．1962 年にビルマ社会主義計画党が組織されたが，1970 年までの国家中枢人事はネー・ウィンの権力維持と国軍幹部への利権配分を意図したものであり，そこに計画党の影響を見出すことはできなかった．計画党は党組織の整備・拡大に努めたが，党拡大に伴う人材の需要増大は，多くが国軍将校の出向によって満たされた．ネー・ウィンは 1971 年以降，計画党を自律化させることを試みるがそれが政治の流動化を促し政治危機を招いた．結局ネー・ウィンが危機回避のため党の政治機能を事実上停止したことで党国家建設の試みは失敗した．

第 4 章「官僚制を破壊せよ―行政機構改革と国軍将校の転出」では，ネー・ウィン体制下における行政官僚機構と国軍の関係を考察する．ビルマでは独立後も植民地期の行政機構の骨格が引き継がれたが，1962 年のクーデタ後，「官僚機構を破壊」するという目標が掲げられ，1970 年代初頭にかけて中央・地方の両レベルで制度改革が実施された．その結果，植民地期に構築された文民官僚機構と幹部官僚が地位を大きく後退させ，さらに国軍将校の行政機関主要ポストへの出向の制度化およびそれに伴う国軍の政治介入の深化が進んだ．

第 5 章「『勝者総取り』の政治風土―政治エリートのプロフィール分析」では，体制転換のたびに政治エリートが大幅に入れ替わる「勝者総取り」と表現されるビルマ政治史における特徴を手掛かりに，ネー・ウィン体制期の政治エリートの経歴を分析する．筆者は，人民議会議員，中央委員会委員，そして国軍高級将校の過去の経歴を分析することで，ネー・ウィン体制期の文民政治エリートがそれ以前の政治エリートからかなり断絶しており，実際に「勝者総取り」が起きていたことを描き出している．また，「断絶」を経てこの時期に登場した新しい政治エリートのうち，文民の党幹部には，軍人が優越する軍政の中で昇進に限界があったと指摘する．

第 6 章「兵営国家の政軍関係―ネー・ウィンによる国軍の掌握とその限界」では，1962 年以降の国軍の組織変容と軍政の長期化との関係を考察する．クーデタ後，国軍内部に体制の根幹を揺るがすような対立が生じることはなかった．これはネー・ウィンが国軍を掌握していたことの証であるが，彼が採った国軍掌握の戦略は，国軍の党軍化と人事システムの整備および分断人事であった．党軍化により国軍に対する諸権限を計画党に移すことで，退役したネー・ウィンが国軍に対して絶大な影響力を行使できる制度的基盤が用意された．加えて，国軍将校のキャリアパスを明瞭化したことで幹部将校の間に現体制維持の

インセンティブが生じ，同時に，人事の停滞による若手将校間での不満蓄積が回避された．しかし，党軍化による統制の実態はネー・ウィン個人による統制であったことや，世代間の認識の溝が対立に発展する可能性を孕んでいたなど，ネー・ウィンによる国軍掌握には限界があった．

終章「結論―ネー・ウィン体制の崩壊と新しい軍事政権の誕生」では，序章で提示した問いに対しての回答を提示する．ネー・ウィン体制は「『ビルマ式社会主義』という大義のもとで行なわれた，独裁者ネー・ウィンによる大規模な国家再編の過程であり」，それは，「国防国家建設」，「党国家建設」，「兵営国家建設」という 3 つの過程を内包していたと結論付け，また，ネー・ウィン体制の持続要因を，ネー・ウィンが国軍将校団に対して「極めて多くの役職配分」を行なったことから，将校団に「体制維持のインセンティブを提供することに」なった点に見出す．続いて，1988 年のネー・ウィン体制の崩壊を長期軍政の体制内変革と捉えて検討し，ネー・ウィンの影響力の低下，軍政内の世代交代，失政の清算が起きている一方，「国軍官僚機構の論理が国家機構全体の論理に直接反映される国家の運転原理」は不変であることを指摘する．

本書は，「長年停滞し」，「現在まで未開拓な研究領域」であるビルマ政治研究に光を当てたことで意義深い書である．1962 年以降のビルマ政治を把握するにはその中心にいる国軍の分析が不可欠であると考えるが，筆者も本書の視角を，「将校団の組織構造と人材の配分を指標にして，国軍の国家における公式・非公式の制度配置を明らかに」し，「その変容過程」を論じる（p. 25）としている．それには国軍の資料へのアクセスが重要となるが，軍の組織的性格上それは容易なことではなく，ましてや閉鎖的な軍事政権下での資料収集となれば極めて困難な作業となろう．しかし，的確な資料の収集と分析・考察に基づいた記述によって筆者の意図は十分に達成されている．

議論は概ね説得的であるが，いくつか気になった点を挙げたい．ネー・ウィンと国軍将校団の関係については制度面が中心に論じられ，「軍官僚機構が非人格化」したことや「分断人事」がネー・ウィンによる国軍掌握の要因として指摘されている（第 6 章）．掌握におけるそれらの効果に異論はないが，制度が規定する非人格的な関係と同時に，権力者と個々の将校の間には何らかの人格的な関係が存在し掌握を左右する要素となるように思える．日本軍政期時代からの部下である側近との関係については人格的要素の存在が推測できる記述になっているが，たとえば新世代の将校の中でも出世が進んでいる将校あるいは戦略的なポストに任命された将校とネー・ウィンとの個人的な関係はどのようなものであったのかなどの疑問が残った．

また，筆者は，ネー・ウィンによる国家再編の過程が 3 種の国家建設過程を内包しているとし，そのうちの「国防国家建設」に関して公式イデオロギーの形成過程の考察を行なっている．しかし，筆者が終章で「国防国家建設」過程について「具体的には」として

挙げる「官製社会組織による国民の動員解除」や「言論統制を通じた社会の脱政治化」などの過程に関するまとまった言及がない．とりわけ，官製社会組織と国軍との関係は気になるところである．筆者も認めているように，国軍と国家の関係を中心にすえたことによる不足の一部ではあろうが，この点に関しては若干物足りなさを感じた．ただし，いずれの点も評者の過大な要望であり，これらの不足が本書の価値を減じるものでは全くない．

本書はビルマ政治研究の書であるが，政軍関係研究の観点からも大きな意義を見い出せる書である．かつて非民主主義体制下にあった発展途上国の多くが，内実に議論の余地はあるものの民主主義体制へと移行した現在，発展途上国を対象とした政軍関係研究の関心は体制移行期や民主主義体制下における政軍関係に集まっているように思える．そのようななかで，本書は非民主主義体制である軍事政権を対象としたものであるが，実証の手法として人事分析を本格的に実施し成功している点で，分析対象の政治体制如何に関わりなく，政軍関係研究全般において極めて意義深い研究であるといえる．政軍関係を取り上げた研究では，将校の人事分析が軍内政治の実態や変容を把握する有効な手法のひとつとして考えられ実践されているが（たとえば，[The Editors 2008]，[玉田 2003：3 章]），本書は，ビルマの軍事政権ないしは国軍内部の構造とその変容を，計画党の役員や国軍幹部などの人事分析によって詳細に描き出すことに成功している（第 3 章，第 4 章，第 6 章）．とりわけ，第 6 章で国軍資料の整理と分析によって国軍将校のキャリア・パターンの安定化と分断人事を描き出し，ネー・ウィンによる国軍掌握手法を解明している箇所は秀逸であり，人事分析の有効性を再認識させるものである．

また，本書が 1962 年から 1988 年のネー・ウィン体制を分析の対象としながらも，同時に，体制崩壊後から現在にまで通じる重要な指摘や示唆を提供している点を高く評価したい．ネー・ウィン体制下で官僚制が「破壊」され文民官僚をはじめとする軍外勢力が弱体化したことや（第 4 章），「国軍将校団への優先的な利益配分システム」（p. 289）が構築されたことなどが，体制後のビルマにおける軍政の長期化に大きな影響を与えていることは疑う余地もない．加えて，討議，取引，調整，妥協といった世代を超えて継承・蓄積されるべき政治的な技術や経験がビルマの政治空間において蓄積されてこなかったことが，不変の抑圧的施策の背景にあるとの示唆（pp. 209-210）や，「『革命』という目的は死に，国軍中心の国家という手段が生き残った．そして，手段の維持そのものが今度は目的になる」（p. 291）との指摘は，現在進められている軍政主導の民政移管がもたらすものを不気味に暗示しているように思える．現在ビルマでは軍政主導による民政移管のプロセスが進んでおり，2010 年には複数政党制による総選挙が予定されている．本書は，副題に「1962-1988」とあるように当該期間を分析対象とした研究であるが，示される筆者の見解は，国軍の利益という観点から，現在，そして将来のビルマにおける国家と国軍の関

係を検討する視座を提供している．本書が，ビルマの現在を理解し将来を展望するうえで読まれるべき書であることは間違いない．

引　用　文　献

The Editors. 2008. Current Data on the Indonesian Military Elite, September 2005-March 2008, *Indonesia* 85 (April): 79-121.

玉田芳史．2003.『民主化の虚像と実像―タイ現代政治変動のメカニズム』京都大学学術出版会．

在来家畜研究会編．『アジアの在来家畜―家畜の起源と系統史』名古屋大学出版会，2009 年，461 p.

片山一道 *

「鶏口となるも牛後となる勿れ」という成語がある．いわば評者の座右の銘なのである．今もなお脇差しのように忍ばせておき，なにが研究活動で大切なのか，などと尋ねられれば，おもむろに抜き出すことにしている．

大上段にかまえるがごとき研究テーマに大勢の人間が群がりへしあうような華々しき流行分野に身を置くよりも，つつましくともよい独特のスタイルを身につけ，誰もかれもがやらない問題にこだわり続けることのほうが，よほど痛快だし，なにかを発見するという研究活動の醍醐味にひたる機会も多いのではあるまいか．つまるところ，それこそが学問という人間の営為の真髄なのではないだろうか，とさえ念じている．この金言にピッタリの感がする本書に出会うことができ，とても爽快な読後感にひたることができた．

本書は第Ⅰ部と第Ⅱ部の 2 部構成となっており，第Ⅰ部では家畜化のプロセスにまつわる原論的な内容であり，おおむね非常に啓発的である．そして第Ⅱ部の各論は各家畜が主人公であり，それぞれに愉しい挿話が盛りだくさん．かなりの人数の家畜学，あるいは畜産学関係の書き手たちが手がける．それぞれが得手とする動物種の家畜化の歴史，そして地域群の系譜関係をテーマにした質量感のあふれる良質の綜説を集成している．それらを野沢謙氏が中心となり感心するほどに周到に編集されている．

おそらくは本書は出版されるまでに，相当な歳月をかけて準備され，あれこれと周到な工夫が施されたのではあるまいか．野沢氏をはじめとする本書の執筆者たちのライフワークのごとき研究活動のエートスが香り高いモルトのように熟成された良書である．なにげなく示される研究データの質も，実は第一級のものなのだろう．それにストイックに展開される論考も好感をもてる．ペラペラと読み急ぐことを凛として拒むような，なにかが感じられる．しっかりと背筋を伸ばして読むような本なのである．

もちろん，その道の専門家たちが，みずからが専門とする分野の専門知識を披瀝する大冊の専門書にはちがいないから，たしかに一見すると，お堅く難渋な学術書のようではある．ことに第Ⅱ部の各論はそうだ．集団遺伝学の方法論を駆使した分析データを展開する系統論関係のロジックを門外者がフォローし

* 京都大学名誉教授